

# 山河

復刻版概要

- 巻数 全3巻十別巻1十別冊1
- 体裁 A5判・上製・総約1、500頁
- 本巻 『山河』第1号〜第33号を全3巻に収録
- 別巻 「戦後大阪詩運動資料」

- 別冊 解説・回想・総目次・索引
- 別冊のみ分売可 本体2,000円＋税

●解説 細見和之「新たなリアリズムをもとめて」

山田兼士「小野十三郎と『山河』」

宇野田尚哉「井上俊夫とサークル詩運動」

黒川伊織「『山河』と関西国民文化会議」

季村敏夫「『山河』における外地」

丁章「『山河』の女性詩人たち」

宇野田尚哉「戦後大阪詩運動資料」解説

長谷川龍生・倉橋健一

●推薦 金時鐘〈詩人〉・長谷川龍生〈詩人〉

●価格 【第1回配本】『山河』第1巻＋第2巻

本体36,000円＋税 2015年7月刊

ISBN978-4-908147-31-9

【第2回配本】『山河』第3巻十別巻十別冊

本体38,000円＋税 2015年11月刊

ISBN978-4-908147-34-0

●主要執筆者一覧

飛鳥 敬	大岡 信	壺井 繁治	松本 一哉
井上 俊夫	大崎 二郎	富岡多恵子	港野喜代子
乾 武俊	草津 信男	永瀬 清子	御庄 博実
内田 朝雄	倉橋 健一	野村 修	湯口 三郎
岡本 彌太	小石原 昭	浜田 知章	吉本 隆明
小野十三郎	島崎 曙海	長谷川龍生	
織田喜久子	趙 三竜	牧 羊子	

## 関連図書〈既刊書〉★残部僅少

【復刻版】  
希望〈エスワール〉 全3巻十別巻1

エスワール社刊「1948年〜1955年」

●解説 高良留美子

●体裁 A5判・上製・総1、780頁

●揃定価96,000円＋税 ISBN 978-4-906943-04-3

●原爆を意識的契機として広島で生まれ、東京で開花

した学生主体のサークル文化運動雑誌。

全11冊を3巻に合本し、別巻に広島版1号〜4号を

収録し解説・総目次・執筆者索引を付す。安部公房、

加藤周一、花田清輝、木下順二などが寄稿。

●推薦 岩橋邦枝・鳥羽耕史・成田龍一・渡邊澄子

【復刻版】  
われらの詩 全2巻十別巻1  
十付録1

われらの詩の会刊「1949年〜1953年」

●解説 宇野田尚哉・川口隆行・海老根勲

●体裁 A5判・上製・総約1、260頁

●揃定価70,000円＋税 ISBN 978-4-906943-20-3

●岬三吉没後60周年記念出版！

本誌は、「原爆詩人」岬三吉を中心に創刊され、職場サークルの拠点的連絡詩誌であり、後には中央の詩運動との関係においても全国的に認知される存在となった。全20号のほかに、別巻に「広島文学サークル」「とだえざる詩」風のように雲のように」を収録し、付録に岬三吉自筆稿本「原爆詩集」を収録した。解説・総目次・索引付。  
●推薦 御庄博実・小沢節子

# 東の「列島」、西の「山河」！

小野十三郎を精神的支柱とし、

浜田知章と長谷川龍生を軸にした本誌は、

新たなリアリズムの詩法を追求し、

多くの秀作を生み出した。

戦後大阪の社会派を結集した詩誌、遂に復刻！

# 山河

1948年▶1961年

復刻版

全3巻十別巻1十別冊1

●解説 宇野田尚哉・細見和之他4名

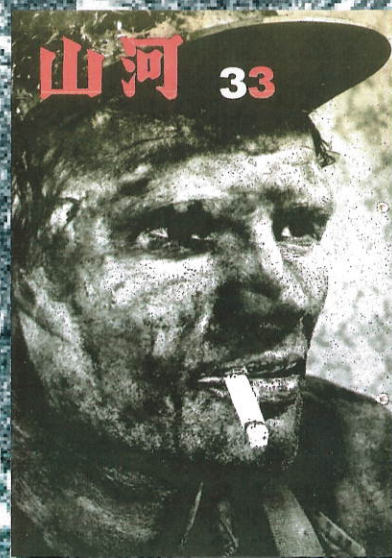
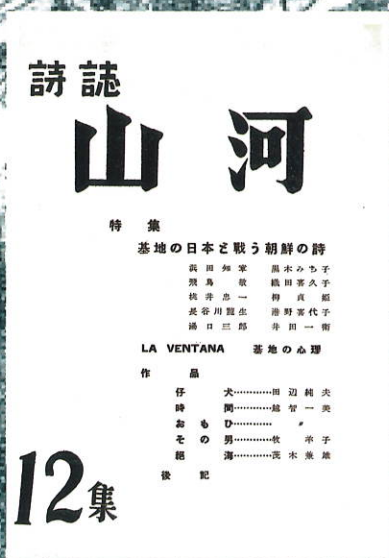
●回想 倉橋健一・長谷川龍生

●定価 第1回配本 本体36,000円＋税

第2回配本 本体38,000円＋税

●推薦 金時鐘〈詩人〉・長谷川龍生〈詩人〉

2015年8月刊行開始



三人社

株式会社  
三人社

〒606-8316  
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘  
電話 075-762-0368  
FAX 075-762-0369  
振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ  
小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

# 戦後詩の原点を省り見る 金時鐘

「近代詩」という言われ方しか知らない私に、詩にも「現代詩」という第二次世界大戦後の新時代に即した詩の思潮があることを知ったのは、日本に來たての一九五〇年初頭のころだった。それまでの私は音調律がよく取れていて口の端にのほりやすい、情感ゆたかな日本の近代詩にぞっこんだった。つまり詩は詠うように書かれなくてはならないものだったのだ。

ところが運命の導きのように手にすることができた小野十三郎先生の『詩論』を介してつながりができていった、大阪における日本の戦後詩のまぶしいばかりの選良たち、なかでも小野先生の評価を一身に集めている、もはや通常の言辞など持ち合わさなくなった長谷川龍生氏や、風貌振る舞いからしていかにも詩壇のドンを思わせる浜田知章氏。おっとり構えているようでその実、兵卒体験を挺に農村の人間模様をきびしく、かついとおしく描き出していた理詰めの井上俊夫氏等々。

これらの新進気鋭の詩人たちが拠っている場が、詩誌『列島』と対峙して日本の戦後詩の鼓動を東西で高めていた、『山河』という詩運動の二団であった。いまだ騒乱のつづく朝鮮からぼっと出の私には、それこそ目を見張るばかりの意識の変革者たちであった。そればかりか「現代詩」にはなお、より能動的な詩の前進運動があることも、この『山河』の中心メンバーたちの動きから教えられてもいた。内心畏れをいだいていた私は直接『山河』に近づくことはなかったが、小野十三郎先生に深く私淑していた私には、『山河』はいわば身内の集まりのような創作の場でもあった。

（キム・シジョン 詩人）

井上俊夫	三島雄一	子子
小野十三郎	岩谷信三	喜喜
大江康徳	西条照太郎	木木
木村重治	田中隆夫	真真
草津信	川口松太郎	西野
村松道平	田村喜一	真真
藤原松太郎	谷村好太郎	喜喜
村上西村	長谷川喜一	木木
原中	谷村喜一	真真
中野重治	長谷川喜一	喜喜

## 或る青春の邂逅

島崎藤村 井上俊夫

昭和十年から十六年にかけて、僕は兵隊としての職に就いた。それまでは、大阪で生活していたけれど、不慣れた軍中の生活の中で、俄に変わっていった。いつかかきかき描いていた、年々おもしろくもややく落つていく、運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。

## サークル詩人のための詩人論

島崎藤村論……井上俊夫  
原中論……西村好太郎  
中野重治論……草津信

クルの中にいる山河の詩者たちの要領に代えて、近代現代詩の歴史を形作りながら四人の詩人論を送りたいと思う。をめぐって貴方たちは、これら四人の詩人たちの、どのようか、いささか資料に欠いた点もあつたが、『山河』の同人たちも改めて振りか

昭和十年から十六年にかけて、僕は兵隊としての職に就いた。それまでは、大阪で生活していたけれど、不慣れた軍中の生活の中で、俄に変わっていった。いつかかきかき描いていた、年々おもしろくもややく落つていく、運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。運命のついで、運命のついでと書きかき描いていた。

# 若い羽ばたきの「山河」に身をふるわせて 長谷川龍生

一九五〇年度の半ば頃から、一九六三年のソ連、東欧紀行までのあいだ、同人誌「山河」の編集部の近くに居た私は、貧しい才能をふる翳して、東京と大阪の二つの都会を右往左往しながら、一心に喘いでいたようにおもふ。「山河」に寄っていた若い同人たちは、編集長の浜田知章を始めとして、たくさんの面々が、入れかわり、立ちかわり、勉学にいそしみ、口角に泡をとばし、社会派としての責任を果していたので、私などは、遅れた意欲に鞭打って、何かといそがしがっていたようすでもあった。現今になって、ふりかえてみると、ただなつかしいばかりではなく、よくぞ貧しい経済の波に押し流されつつ、生きぬいてきたことは、何んだか、たのもしいかぎりにおもひ到る。

編集長の浜田知章、井上俊夫などは、早くから日本共産党に入党していて、「政治と文学」の問題に直面しながら、意気揚々としていた。筋かね入りとは言わないまでも、しっかりととしていて、ふらふらとしている私などは、すぐさまにたたくめされた。しかし、ほんとうは、「自由」がままに育成されていた。

ながい間、失業していた私は、東京に棲みついて、宮仕えに入ったが、至難の連続で、文学青年の気もちは喪失しなかったが、学歴社会の中では、苦勞に苦勞をかさねた。文学一筋の夢ばかりを追っていて、実績の薄弱さが目立っていたが、若いだけに「勢い」が十分に存在していたようにおもふ。

浜田知章の最初のつれ合いが、岡本彌太の長女であるルカさんであった。このルカさんの人柄で、「山河」の力量は持ちこたえた。あとになって小野十三郎先生の背中の中の実が全体に（全同人）いき渡って、リアリズムの深い討ち込みに、「山河」の成果が少しづつ伸長していった。小野十三郎先生の見えないうちでも見のがすわけにはいかない。

あとになって国民文化会議の仕事について浜田知章の東ドイツ紀行が、「山河」の終幕に成ってしまうわけだが、よくぞこの同人誌が続いたものだ、ためいきが出てしまう。私なども、いつのまにか、時代の波に押しながされて、孤独な立場に追いつめられ、世界の政治と文学の地図も、すっかり変り切ってしまった。現実は、非常に、興味深々たるものになって、この日本も、新しい危機が一刻一刻、切迫しつつ、転形期の中枢に入ろうとしている。若い時代の「はばたきの動くさま」を注視するの、未来への勉学の二つに教えることができる。日本の各分野の「歴史」は、くり返さないよう、二つくり返しているように思われてならない。八〇才台の後半になって、身の廻りをうかがうと、二度と見る残りの状況を眼前にある。「山河」といって雑誌がものを語る季節である。

（はせがわ・りゅうせい 詩人）

### 出 発

港野喜代子

今日も、さびしく寝てしまいました。夜明けまで、私は海を眺めて出かけました。翌日には波が打ち寄ることを知りながら砂丘の端に私は足を進ませました。もう一つは仕事を買えない下さ。両手にふるふる種子のため。私の足は他に無かったです。波が打ち寄せた後形に揺られて。私は海の手前まで歩きました。美しい景色はザリザリと冷えていって。なんの前よれなしに静やされた家から突然に、くすされてしまった漆の下から。

### 星

日本共産党創立30周年記念特集

